

女性推理小説家による女性探偵の変遷

— Amelia ButterworthからCordelia Grayまで —

藤 田 祥 代

序

推理小説の歴史において、初めて登場した女性探偵は、ミセス・グラッドン (Mrs. Gladden) という人物であり、イギリスで匿名により発表された『女探偵』(*The Female Detective*, 1864) に登場する。イギリスの警察に女性が入る事が公式に認められる50年以上前の事だった (Klein 18)。

女性推理小説家による女性探偵の初登場作品は、アンナ・キャサリン・グリーン (Anna Katharine Green, 1846~1935) の『隣家殺人事件』(*That Affair Next Door*, 1897) である。この作品では、アメリア・バターワース (Amelia Butterworth) という年配の独身女性が、ニューヨーク市警の警部エベニザー・グライス (Ebenezer Gryce) と出会い、一緒に事件捜査をする。しかしながら、グライス警部こそがグリーン の作品を代表する探偵であり、バターワースはグライス警部を引き立たせる役割でしかなかった。

1900年以降、バロネス・オルツイ (Baroness Orczy, 1865~1947)、アガサ・クリスティ (Agatha Christie, 1890~1976)、ドロシー・L・セイヤーズ (Dorothy Leigh Sayers, 1893~1957) などの女性推理小説家が躍進し始めたが、彼女たちが最初に登場させたのは、〈隅の老人〉 (The Old Man in the Corner)、エルキュール・ポアロ (Hercule

Poirot), ピーター・ウィムジイ卿 (Lord Peter Wimsey) といった男性探偵だった。その後、オルツィは『ロンドン警視庁のレディ・モリー』(*Lady Molly of Scotland Yard*, 1910) で、獄中にある夫の無罪を証明するために活躍するレディ・モリー (Lady Molly) という女性警官を創造した。さらに1930年には、クリスティーがミス・マーブル (Miss Marple) という老婦人を、セイヤーズがハリエット・ヴェイン (Harriet Vane) という推理小説家を創造し、探偵として活躍させることで、女性が推理小説の主役になり得るという可能性を広げた。

1960年代後半にアメリカで始まった女性解放運動が、70年代にかけてイギリスにも広まり、それが小説の内容にも反映されるようになった。この事実を証明するのが、P・D・ジェイムズ (Phyllis Dorothy James, 1920~) が『女には向かない職業』(*An Unsuitable Job for a Woman*, 1972) で登場させたコーデリア・グレイ (Cordelia Gray) である。コーデリアはバーニー・プライド (Bernie Pryde) が経営している探偵事務所で臨時タイピストとして雇われていたが、バーニーに探偵として仕込まれ、共同経営者になった。その後、バーニーが自殺をしたため、コーデリアは周りから、探偵は女性には向かない職業だと言われながらも、1人で事務所を続けていく決心をする。22歳の若き女性が、1人で事件捜査を進めていく健気な姿が、この作品の最大の魅力である。以上のように、時代の流れにより、女性探偵の立場や役割も変化している。本論では、A・K・グリーン、アガサ・クリスティー、ドロシー・L・セイヤーズ、P・D・ジェイムズの作品に登場する女性探偵を、「職業探偵 (男性) を補佐する素人探偵」、「職業探偵」、「夫婦探偵 & 名探偵とその恋人」という3つのグループに分類して、女性推理小説家による女性探偵の変遷を論じる。

1. Amateur Detectives

アメリア・バターワースは、『隣家殺人事件』、『失踪者の抜け道』(Lost Man's Lane, 1898), 『七つの燈』(The Circular Study, 1900)の3作品に登場する。『七つの燈』で、グライス警部はアダムズ(Adams)氏という富豪の殺人事件を知らされた。事件を知らせたのは、高級な服装をした婦人に頼まれて使いをした少年だった。被害者は、唾で耳が不自由な下男と2人で暮らしていた。被害者の部屋には、白、紅、緑、青、堇、黄、赤の7色に変化する電燈があった。殺人現場には、婦人用の日傘が残されていた。グライス警部が、その日傘と少年が見た服装を手掛かりに謎の婦人を探すと、以前に一緒に捜査をしたことがあるアメリア・バターワースだった。バターワースは、偶然にアダムズ氏の屋敷のそばを通り、中から叫び声が聞こえたために、思わず屋敷の中に入り、死体を発見したのだった。グライス警部には、7色の電燈の意味が分からなかったが、バターワースは電燈の変化による下男の行動を見て、白は水を持って来るように、紅は煙草を持って来るようになどという、主人から下男への信号だと気がついた。

『七つの燈』でのバターワースは、素人探偵としてグライス警部に貢献するが、他人の家へ無断で入り、手掛かりを探索するために現場の物を動かすなど、設定が不自然である。それでも、プロの探偵に協力するアマチュアという構図は、アメリカのメアリ・ロバーツ・ラインハート(Mary Roberts Rinehart, 1876~1958)が創造したミス・ピンカートン(Miss Pinkerton)という看護婦や、イギリスのグラディス・ミッチェル(Gladys Mitchell, 1901~1983)が登場させた心理学者のブラッドリー(Bradley)夫人などの先駆けとなった。

オールドミスの素人探偵という点で、アメリア・バターワースに最も近い人物は、アガサ・クリスティーのミス・マーブルである。1928年に発表された短編小説「火曜クラブ」(“The Tuesday Night Club”)で

初登場する。「火曜クラブ」では、ミス・マーブルの家に集まった元警視総監や弁護士、作家、画家など、様々な職業の人々が、各自のみが真相を知っている迷宮入りした事件を語り、その解決を推理し合うというクラブを立ち上げた。提出された問題に、メンバーは頭を抱えるが、ミス・マーブルは常に正しい解答に到達してしまう。

ミス・マーブルは“I am afraid I am not clever myself, but living all these years in St Mary Mead does give one an insight into human nature.” (Christie, *The Thirteen Problems* 14) と言った。ミス・マーブルはセント・メアリ・ミード (St Mary Mead) という小さな村に長年住んでおり、このような村で暮らしていると、人間というものが分かると述べている。さらに、ミス・マーブルは、人間というものはどこにいても変わりはないと考えているため、難事件が起きた時は、セント・メアリ・ミードで起きた類似する出来事を例に出し、推理をする。

例えば「火曜クラブ」で元警視総監のヘンリー・クリザリング (Henry Clithering) から出題された問題は、同じ食事をとった3人の中で1人だけが死んでしまったという毒殺事件の謎だった。被害者は中年婦人で、メイドが食事を作り、被害者の夫と世話係も同じ物を食べた。この話を聞いていたミス・マーブルは、ある屋敷の夫人の事を考えていた。彼女の夫が亡くなった時、夫には愛人がいて、愛人との間に子供が5人もいることが判明し、遺産は全てそちらに行ってしまったという話だった。レイモンドは、その話が毒殺事件と何の関係があるのかと聞くと、ミス・マーブルは2つの出来事は類似していると答えた。ミス・マーブルは若いメイドがいると聞いた時から、このメイドは夫と関係があり、夫がメイドをそそのかして妻を殺させた事に気付いていたのだった。

このように、短編集『火曜クラブ』(*The Thirteen Problems*, 1932) に収められている13編のうち12の短編で、ミス・マーブルは他のメンバーから事件の話を知っただけで解決してしまう。つまりミス・マーブルは、

〈隅の老人〉のような、椅子に座り、事件の話を聞いただけで真相を見破ってしまう「安楽椅子探偵」だと言えるが、ミス・マーブルはカリブ海、ロンドン、イギリス周辺の数か所でも事件を解決しているため、単なる「安楽椅子探偵」では無く、行動派の探偵でもある。

クリスティーの作品を代表する素人探偵にはもう1人、アリアドネ・オリヴァ夫人 (Mrs. Ariadne Oliver) がいる。オリヴァ夫人は中年の人気推理小説家で、『ひらいたトランプ』(Cards on the Table, 1936) でエルキュール・ポアロと出会った。『ひらいたトランプ』では、カードゲームの最中に殺人事件が起きた。容疑者は、被害者と同じグループでゲームをしていた4人である。別のグループでゲームをしていたのが、ポアロ、バトル警視 (Superintendent Battle)、諜報局員のレイス大佐 (Colonel Race)、オリヴァ夫人の4人である。バトル警視は、レイス大佐は諜報局にいる人物であり、ポアロも私立探偵として警察と何回も行動を共にしている人物だから、捜査に加わるのは自然であるが、オリヴァ夫人は素人だと見なしていた。それでも、バトル警視はオリヴァ夫人を捜査会議に加わらせた。バトル警視には素人扱いされたが、オリヴァ夫人は “I’ve got a plan. There are four of us – four sleuths, as you might say – and four of them! How would it be if we each took one. Backed our fancy!” (Christie, Cards on the Table 77) (以下 Cards と略す) と述べ、自分も探偵だと主張した。そういうわけで、オリヴァ夫人も捜査活動に参加することになった。

しかしながら、オリヴァ夫人がしている探偵の仕事とは、小説の中で殺人事件を描き、それを架空の探偵スベン・ヤルセン (Sven Hjerson) に推理させる事で、実際の殺人事件は初体験だった。それでもオリヴァ夫人は次のように言った。

‘To tell you the truth, a real murder has never come my way before. And, to continue telling the truth, I don’t

believe real murder is very much in my line. I'm so used to loading the dice – if you understand what I mean. But I wasn't going to be out of it and let those three men have all the fun to themselves... (Christie, *Cards* 131-132)

オリヴァ夫人は、本物の殺人事件は自分の手には負えない事は分かっていた。それでも、自分だけ探偵捜査の除け者にされたくはなかったため、行動することにした。

『マギンティ夫人は死んだ』(*Mrs. McGinty's Dead*, 1952) では、殺人事件で逮捕され、死刑が確定した男の容疑を晴らすために捜査をするポアロと、殺人事件があった村に滞在していたオリヴァ夫人が再会する。ポアロから殺人事件の再調査の話聞かされたオリヴァ夫人は、“Hercule Poirot needed help. She would take a look at the inhabitants of Broadhinny, exercise her woman's intuition which had never failed, and tell Poirot who the murderer was. Then he would only have to get the necessary evidence.” (Christie, *Mrs. McGinty's Dead* 95) (以下 *McGinty's* と略す) と考えた。このようにオリヴァ夫人は、ポアロは助力を必要としているのだから、女性の直感を働かせて、ポアロに誰が真犯人なのか教えてあげれば、あとはポアロがその証拠を固めるだけで良いと、根拠の無い自信を見せた。ところが、オリヴァ夫人は実際には真犯人とほとんど一緒にいたにもかかわらず、全く気が付かなかった。そのようなオリヴァ夫人に対し、ポアロは女性の直感は当てにならないと伝えた。

『第三の女』(*Third Girl*, 1966)では、自分が犯したらしい殺人について相談したいと、ノーマ・レスタリック (Norma Restarick) という若い女性がポアロを訪ねて来た。ところがノーマは何も告げないまま立ち去ってしまった。ノーマをポアロの所へ行くように指示したのはオリヴァ夫人だった。オリヴァ夫人から事情を聞いたポアロは、オリヴァ

夫人と共に捜査を始めた。ポアロは、殺人事件の捜査には危険がつきものなので十分に注意をするようにと、オリヴァ夫人に警告したのだが、オリヴァ夫人はそれを一笑に付した。オリヴァ夫人は完全な行動派であるため、ノーマが親しくしていた青年の尾行に挑戦した。尾行は失敗し、オリヴァ夫人は推理小説のネタに尾行をしてみたと言ったと青年をごまかし、何とか事なきを得たと思われたが、その帰り道、オリヴァ夫人は何者かに背後から殴られてしまった。

以上のように、好奇心が旺盛で行動的なオリヴァ夫人は、ポアロに協力するというよりは、張り合おうとして、あくせく捜査に乗り出す。女性の直感を主張するのみでなく、積極的に怪しい人物に近づこうとするため、ポアロを苛立たせる時もある。それでも、“The well-known detective story writer and Hercule Poirot were on friendly terms.” (Christie, *Third Girl* 16) と書かれているように、ポアロとオリヴァ夫人は親しい友人同士なのだった。グリーンが描く作品に登場するグライス警部とバターワースは “As a detective duo, Gryce and Butterworth compliment each other...Their values provide common ground for working together, and their lively camaraderie surpasses merely the rivalry of two sleuths.” (Maida65) と描写されている。このような、単なる探偵としての活動を越えた2人の友情は、ポアロとオリヴァ夫人にも共通する部分である。オリヴァ夫人はミス・マーブルほど直観力に長けているわけではないが、ポアロの協力者兼良き友人なのだった。

『パディントン発4時50分』(4:50 from *Paddington*, 1957) のミス・マーブルは、友人であるマギリカディ夫人 (Mrs. McGillicuddy) から、夫人が列車に乗っている時、並んで走る列車の中で殺人が行われている場面を目撃した、という話を聞かされた。ミス・マーブルはマギリカディ夫人と一緒にその時と同じ列車に乗って調査をしたが、何も収穫は無かつた。殺人犯が死体をどこに隠したのかを調べようとしたミス・マーブル

だったが、自分の年齢と体力の衰えに悩み、自分だけではあちこちへ出掛けて調査をするのは無理だという壁にぶつかったため、自分を手助けしてくれるある人物に思い当たった。

それは、ルーシー・アイルズバロウ (Lucy Eyelesbarrow) という家政婦で、以前ミス・マーブルの世話をするために雇われた人物だった。ルーシーはオックスフォード大学の数学科を首席で卒業した才媛で、将来は立派な学者になるものと囑望されていた。ところが、ルーシーは学者の生活は報いが少ないと考え、金を得るために、家政婦という仕事を選んだ。ルーシーは家政婦として素晴らしい評価を得ていたので、自分の好みで、雇われる家を選べるようになった。このようなルーシーに、ミス・マーブルは死体が運ばれた可能性が高いクラッケンソープ (Crackenthorpe) 家で雇われて欲しいと頼んだ。有能なルーシーはクラッケンソープ家の敷地内で死体を発見し、ミス・マーブルの期待に応えた。死体が見つかり、警察にこれまでの経緯を全て話したルーシーは、次のように言った。

‘Well, as far as Miss Marple is concerned I’ve done my job, I’ve found the body she wanted found. But I’m still engaged by Miss Crackenthorpe, and there are two hungry boys in the house and probably some more of the family will soon be coming down after all this upset. She needs domestic help. If you go and tell her that I only took this post in order to hunt for dead bodies she’ll probably throw me out. Otherwise I can get on with my job and be useful.’

(Christie, 4:50 from *Paddington* 60)

一四　ルーシーは探していた死体を見つけたので、ミス・マーブルから受けた仕事はやり終えた。そのため、これ以上クラッケンソープ家で働く必要

は無くなったわけである。それでもルーシーはまだミス・クラッケンソー
プに雇われている身であり、家には育ち盛りの2人の少年や、事件を聞
いて帰省して来る他の家族もいて、家事を手伝う人間が必要になるため、
ルーシーは屋敷に留まらなければならない。このようにルーシーは警察
を説得して、自分がこの屋敷に来た本当の理由を隠したままクラッケン
ソープ家に残ることになった。家政婦としても、ミス・マーブルの補佐
役としても優秀なルーシーは、『パディントン発4時50分』のみの登場
ではあるが、「真に記憶に残るアマチュア探偵となった」(Bunson 219)
と断言できる。

1928年にS・S・ヴァン・ダイン(S.S. Van Dine,1862~1960)は「探
偵小説作法20則」(“Twenty Rules for Writing Detective Stories”)と
いう推理小説に関する法則を制定した。この法則の第11条は“A
servant must not be chosen by the author as the culprit. This is
begging a noble question. It is a too easy solution. The culprit
must be a decidedly worth-while person – one that wouldn’t ordi-
narily come under suspicion.”(Van Dine 191)となっている。つま
り、ルーシーのような使用人は、本来は推理小説の犯人にさえなれない
ほど軽視されていた存在だった。そのような使用人を探偵役にしたクリ
スティーは、革新的な作家であったと言える。しかしながら、ルーシー
はミス・マーブルの代わりに行動をし、謎を解く手掛かりを与える役割
であり、主役にはなれなかった。

2. Professional

A・K・グリーンは、1915年にもう1人の女性探偵を創造した。ヴァ
イオレット・ストレンジ(Violet Strange)という上流階級出身の若い
女性であり、彼女は金を稼ぐことを目的としているプロの私立探偵であ
る。ドロシー・L・セイヤーズはヴァイオレットのような若い女性探偵

について、次のように述べている。

There have also been a few women detectives, but on the whole, they have not been very successful. In order to justify their choice of sex, they are obliged to be so irritatingly intuitive as to destroy that quiet enjoyment of the logical which we look for in our detective reading...Why these charming creatures should be able to tackle abstruse problems at the age of twenty-one or thereabouts, while the male detectives are usually content to wait till their thirties or forties before setting up as experts, it is hard to say. Where do they pick up their worldly knowledge? Not from personal experience, for they are always immaculate as the driven snow. (Sayers, "The Omnibus of Crime" 79)

女性探偵は、全般的に成功しているとは言い難く、女性を探偵にしたことを正当化するため、女の直感を強調し過ぎて、読者が推理小説に期待する論理の楽しみが台無しにされると、セイヤーズは考えている。さらにセイヤーズは、なぜ年端もいかない女性が探偵という職業を選んだのか、世慣れした知恵はどこで手に入れたのか疑問を抱いている。¹⁾

ヴァイオレットは「第二の銃弾」("The Second Bullet")の中で、息子を銃殺し、自殺をしたジョージ・ハモンド (George Hammond) という男の事件の真相を暴いて欲しいという依頼を受けた。ヴァイオレットの雇い主は、ヴァイオレットならハモンドが自殺では無く他殺であり、行方不明の弾丸を発見できると考えた。ヴァイオレットに会いに来たハモンド夫人は、ヴァイオレットがまだ若いので、事件の裏付けとなる話をするかためらっていたが、ヴァイオレットは "So inexperienced you would say and so evidently a member of what New Yorkers call

‘society.’ Do not let that trouble you. My inexperience is not likely to last long and my social pleasures are more apt to add to my efficiency than to detract from it.” (Green, *The Golden Slipper and Other Problems for Violet Strange* 19) (以下 *Golden* と略す) と言った。ヴァイオレットは探偵としての任務の合間に、社交界の花形として様々な行事に顔を出している。そこでの楽しみは、自分の能率を上げていると、ヴァイオレットはハモンド夫人に説明した。“Violet Strange in society was a very different person from Violet Strange under the tension of her secret and peculiar work.” (Green, *Golden* 22) と記述されているように、社交界にいる時と、秘密の特殊な仕事で緊張している時のヴァイオレットは別人だった。

ヴァイオレットは事件現場で、事件のあった時刻にハモンドがしたはずの行動を推理して、同じ動作をしてみた。そこでヴァイオレットは、事件当時に何が起こったのかを悟った。ハモンドがどこに弾丸を撃ったのかは分かったが、撃った後の弾の行方までは分からなかった。ヴァイオレットの視線が、2人の死体が発見された場所へ向かった時、彼女は真相を理解した。それは次のように記されている。

Had the idea – the explanation – the only possible explanation covering the whole phenomena come to her at last?

It would seem so, for as she so stood, a look of conviction settled over her features, and with this look, evidences of a horror which for all her fast accumulating knowledge of life and its possibilities made her appear very small and very helpless. (Green, *Golden* 23)

ヴァイオレットの頭の中に、全ての現象を説明できる解答が浮かび上がり、彼女の顔は確信に満ちた表情に変わった。そこには恐怖が見え、そ

の恐怖は、ヴァイオレットの人生経験や不測の人生に対する知識にもかかわらず、彼女を非常に小さく、非常に頼りなげに見せた。この記述には、彼女がどのように真相を解き明かしたかの説明は無い。つまり、セイヤーズが述べた「女の直感」を使って、ヴァイオレットは真相を突き止めたのだろう。

1970年代から80年代にかけて、アメリカの推理小説には女性の私立探偵が多く登場した。マーシャ・ミュラー (Marcia Muller, 1944～) のシャロン・マコーン (Sharon McCone), サラ・パレツキー (Sara Paretsky, 1947～) のV・I・ウォーショースキー (V.I. Warshawski), スー・グラントン (Sue Grafton, 1940～) のキンジー・ミルホーン (Kinsey Millhone), カレン・キエフスキー (Karen Kijewski, 1943～) のキャット・コロラド (Kat Colorado) などである。このような女性の私立探偵の先駆けとなったのが、イギリスの推理小説家P・D・ジェイムズのコーデリア・グレイだと言える。

先述したように、コーデリアは探偵事務所を経営していたバーニイ・プライドに雇われ、バーニイに探偵として仕込まれて共同経営者をしていた。バーニイの自殺後、周囲からは、探偵は女性には向かない職業だと言われるが、コーデリアは1人で事務所を継ぐ決意をした。数日してから訪れた依頼人と対面した時、コーデリアは “I must be calm, must show her that I am tough. This silliness is only the strain of Bernie's funeral and too much standing in the hot sun.” (James, *An Unsuitable Job for a Woman* 19) (以下 *Unsuitable* と略す) と思った。コーデリアは初めて1人で依頼人と対面したことで不安を覚えたが、その気持ちをバーニイの葬式での緊張と天気のをいにした。そして、不安を感じている自分に腹が立った。依頼の内容は、有名な微生物学者の息子が自殺した理由を究明してほしいというものだった。依頼を受けたコーデリアは、準備に取り掛かった。それは次のように書かれている。

Finally, she found herself a fresh notebook, headed it *Case of Mark Callender* and ruled up the last few pages ready for her expense account. These preliminaries had always been the most satisfying part of a case, before boredom or distaste set in, before anticipation crumbled into disenchantment and failure...Cordelia enjoyed clothes, enjoyed planning and buying them, a pleasure circumscribed less by poverty than by her obsessive need to be able to pack the whole of her wardrobe into one medium sized suitcase like a refugee perpetually ready for flight.

(James, *An Unsuitable Job for a Woman* 37)

コーデリアには、調査に取り掛かる時にする楽しみがあった。それは、新しいノートに事件名を表記し、出費の計算のために末尾の何ページかに罫線を引くことだった。この作業は、退屈と嫌悪が起こる前や、期待が幻滅と失敗に変わる前の、一番楽しい部分であった。さらにコーデリアは、お洒落をする事が好きで、調査中に会う人々や場所に合わせて、服装計画を練る。コーデリアは捜査の大半をジーンズやスカート、気候に合わせたセーターなどを着て、どのような場合の客と対応しても良いように、慎重な熟慮の末に貯金で買った「イエーガー」のスーツ²⁾も用意してある。

コーデリアが登場する第2作目の『皮膚の下の頭蓋骨』(*The Skull Beneath the Skin*, 1982)でも、コーデリアは捜査中の服装に細心の注意を払う。“The creamy-fawn pleated skirt in fine wool and the matching cashmere two-piece, both bought at Harrods in the July sale, should, she felt, take care of most occasions; the cashmere’s understated extravagance might, with luck, inspire confidence in the Agency’s prosperity.” (James, *The Skull Beneath the Skin* 56)

(以下 *Skull* と略す) と記述されているように、探偵事務所が繁昌しているという信頼を強めるため、コーデリアは特売で買った上質のウールのプリーツ・スカートと、それに合うカシミアのセーターを揃えた。

『皮膚の下の頭蓋骨』では、コーデリアにベヴィス (Bevis) とミス・モーズリイ (Miss Maudsley) という助手が出来た。厳密に言えば、この2人は派遣事務所の社員で、この派遣事務所の財力に余裕がある場合のみ、2人は1週間単位で派遣されて来る。『女には向かない職業』の頃よりは頼もしい雰囲気になったコーデリアの事務所ではあるが、迷子になったペット探しの謝礼で、どうにか維持している状態だった。そのような環境の中で、コーデリアは、死を暗示する脅迫状に怯える女優の身辺警護をして欲しいという依頼を受けた。“The most onerous part of the preparation for this new case was deciding which clothes to pack.” (James, *Skull* 55) と書かれているように、コーデリアは今回の任務の準備をする中で、一番厄介な部分は、どのような衣服を持っていくか決めることだと思った。つまり、コーデリアは自分の服装次第で、事務所の印象や自分の探偵としての能力が高く評価されると考えているわけである。

ヴァイオレット・ストレンジの服装が “He glanced at her person; it was simply clad but very expensively...” (Green, *Golden* 13) と述べられているように、シンプルではあるが非常に高価であると、漠然と記述されているのに対し、コーデリアの服装は、ロンドンの衣料品メーカー名や布の素材など、非常に具体的に描写されている。ここから、コーデリアの経済状況やファッション・センスなどを、読者に推測しやすくさせている。また、初めて1人で仕事をする事に不安を覚えながらも、新しいノートを使用する事を楽しむという、働く若い女性の初々しさが描かれている。

『女には向かない職業』と『皮膚の下の頭蓋骨』のどちらも、探偵としてのコーデリアには満足のいく結末にはならなかった。“James’s

talent is for realistic description of people and places than for the intricacies of the crime puzzle.” (Symons 293) と述べられているように、ジェイムズは複雑な謎解きよりも、人物や土地柄の描写に重点を置いた。そのため、作品の中では、事件の推移とともに、コーデリアの人となり が克明に描かれる。またコーデリアは、1人で事件を調査しようと意気込み、悪に立ち向かう強さを持っているが、事件関係者たちを良く知るにつれて、“And never before had she felt so inadequate for the task, pitting her youth, her inexperience, her meagre store of received wisdom against the immense mysteriousness of the human heart.” (James, *Skull* 317) と記述されているように、人間の心という深い謎を追求するには、自分はまだ若く、経験不足であるため、探偵という仕事は自分には不向きなのではないかという弱さも見せている。このようなコーデリアの姿勢が、読者に共感や好感を与えているため、コーデリアが登場する作品は2作のみであるにもかかわらず、コーデリアはジェイムズ作品を代表する探偵となる。

3. The Couple Detective

コーデリアやヴァイオレットは、男性に頼らず、独力で事件の捜査に当たるが、男性探偵とコンビを組む女性探偵もいる。アメリア・バターワースやオリヴァ夫人は男性探偵の引き立て役というタイプであるが、男女がほぼ同等の比重で事件解決の推理や実地活動に当る探偵もいる。その典型的な例が、クリスティーが『秘密機関』(*The Secret Adversary*, 1922)の中に登場させたトミー・ベレズフォード (Tommy Beresford) とタペンス・カウレイ (Tuppence Cowley) という、2人合わせて45歳にも満たない若い男女である。

タペンスの本名はブルーデンス (Prudence) というが、ある理由により、タペンスという愛称で通っている。タペンスは第1次世界大戦中

にロンドンの病院に勤め、その後はトラックや将官の運転手を務めていた。このような経歴にもかかわらず、終戦後は無職になってしまった。金を稼ぐ必要に迫られたタペンスは、自分と同じ境遇にいた幼馴染みの青年トミーと再会し、「青年冒険家商会」を結成した。秘密情報局の長官であるカーター氏 (Mr. Carter) に雇われた2人は、英国の極秘文書消失事件に巻き込まれた。カーター氏から、くれぐれも慎重に行動するように警告されたタペンスであるが、“Tuppence’s spirits rose mercurially. Mr. Carter’s warnings passed unheeded. The young lady had far too much confidence in herself to pay any heed to them.” (Christie, *The Secret Adversary* 68) (以下 *Secret* と略す) という記述があるように、彼女には自信があり過ぎて、カーター氏の警告などに耳を傾ける暇が無く、心は躍動していた。ところが、トミーが不審な男を尾行した後、消息不明になってしまったため、タペンスは次のような心境になった。

Somehow, without Tommy, all the savour went out of the adventure, and, for the first time, Tuppence felt doubtful of success. While they had been together she had never questioned it for a minute. Although she was accustomed to take the lead, and to pride herself on her quick-wittedness, in reality she had relied upon Tommy more than she realized at the time...she had really relied a good deal on his judgment. He might be slow, but he was very sure.

(Christie, *The Secret Adversary* 88)

待望の冒険が始まり、タペンスは持ち前の好奇心と行動力でこの冒険に先臨もうとしていた。しかしながら、トミーがいないため、タペンスの冒険に対する興味は浅くなってしまった。タペンスは、自分で考えていた

以上にトミーを頼りにして、トミーの判断を信頼していた事に気が付いたのだった。

また、『NかMか』(N or M?, 1941)には次のような記述がある。

“I don't know that I really would want to do that...

Tuppence and I, you see, aren't on those terms. We go into things – together!”

In his mind was that phrase, uttered years ago, at the close of an earlier war. A *joint venture*...

That was what his life with Tuppence had been and would always be – a Joint Venture... (Christie, N or M? 47)

『NかMか』では、情報部からナチの大物スパイ〈NとM〉の正体を秘密裡に探るようという任務がトミーに与えられた。トミーはタペンスには内緒で任地である〈無憂荘〉に赴いたが、タペンスはすでにブレンキンソップ夫人 (Mrs. Blenkinsop) と名乗り、〈無憂荘〉に滞在していた。タペンスは、情報部から来たグラント氏 (Mr. Grant) とトミーの会話を盗み聞きし、先回りをしたのだった。グラント氏にその事実を伝えたトミーは、どのような冒険でも一緒に飛び込んで行くのが、自分とタペンスであると宣言した。““We always do want the same things,” said Tuppence happily.” (Christie, N or M? 218) というタペンスの幸せそのものといったセリフがあるように、2人が願う事はいつも同じであり、““I'll look after her, sir,” said Tommy. “And I'll look after you,” retorted Tuppence, resenting the manly assertion.” (Christie, Secret 33) と言っている事からもわかるように、2人は常にお互いをフォローし合い、連携して事件を解決してきた。

『秘密機関』の後、結婚をした2人は平和で退屈な日々を送っていたが、カーター氏から、国際探偵事務所の運営を任せられ、冒険を求めて

欠

いたタペンスは乗り気になった。しかしながら、2人とも探偵としてはアマチュアであるため、アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859~1930) のシャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes), バロネス・オルツィの〈隅の老人〉, クリスティーのエルキュール・ポアロなど、推理小説の中の名探偵たちの手法を真似する事にした。そこでの活躍が収められているのが短編集『おしどり探偵』 (*Partners in Crime*, 1929) であり、最後の短編で、タペンスが身籠っていることが明らかになる。

長編第2作目の『NかMか』では、2人は中年夫婦になっていて、デボラ (Deborah) とデリク (Derek) という双子の子供たちは、仕事を持つ年齢になっている。第3作目の『親指のうずき』 (*By the Pricking of My Thumbs*, 1968) では初老、第4作目の『運命の裏木戸』 (*Postern of Fate*, 1973) では70歳を過ぎた高齢夫婦になっていたが、2人の敢闘精神は衰えていなかった。

『親指のうずき』でのタペンスは、1枚の風景画を巡る老婦人失踪事件を調査中、何者かに後頭部を殴られ、行方不明になってしまった。“I wish to goodness you could look after Mother properly,” said Deborah, severely. ‘None of us have ever been able to look after her properly,’ said Tommy.” (Christie, *By the Pricking of My Thumbs* 261) (以下 *Pricking* と略す) と書かれているように、娘のデボラからしっかりとタペンスを見張るように言われたトミーは、タペンスを見張れる人間などこの世にはいないと言い返した。デボラに “I wish at her age she’d learn to sit quiet and not do things.” (Christie, *Pricking* 260) と愚痴をこぼさせるほど、家に落ち着く事はない、冒険心が旺盛のタペンスであるが、殺人者と対面していた時、“Tuppence struggled. She thought, ‘I can stop her easily. Easily. She’s an old woman. Feeble. She can’t —’ Suddenly in a cold tide of fear she thought, ‘But I’m an old woman, too. I’m not as strong as I think

myself. I'm not as strong as she is. (Christie, *Pricking* 341) と記述されているように、対面しているのが老婦人であるため、タペンスは容易に対処できると考えていた。ところが、自分も老婦人であり、自分で思っているほど強くは無いという、突然の冷たい恐怖が彼女の心臓を鷲掴みにした。これまでの冒険でも、タペンスは幾度も危険な状況を体験し、それを楽しんでいた。今回のタペンスも、“Prudence Beresford, Private Investigator, that's what I am...” (Christie, *Pricking* 86) と自分に言い聞かせ、臨んだ冒険であるが、年齢の経過を初めて意識して、“Oh Tommy, Tommy, what have I got myself into this time?” (Christie, *Pricking* 343) と言い、今回の事件に巻き込まれた事を後悔した。

どうにか危機を乗り越えたタペンスは、“I want to go home. HOME, Thomas. And stay there.” (Christie, *Pricking* 352) と宣言したのだが、『運命の裏木戸』で引っ越した家から発見された古本に、気になるメッセージが記されていたため、その謎を解くために奮闘することになる。トミーが “It was always difficult keeping Tuppence out of danger.” (Christie, *Postern of Fate* 88) (以下 *Fate* と略す) と考えているように、タペンスを危険から遠ざけておくことは困難であった。

秘密情報局に勤めていたのはトミーのみで、タペンスは完全なるアマチュアという立場であったが、“Tommy might have hesitated. Tuppence did not hesitate for a minute.” (Christie, *N or M?* 64) という記述が示すように、タペンスの好奇心の強さと度胸の良さはトミー以上だった。そのため、トミーの昔の仲間からは “One in a thousand, she is. But I'm sorry for someone who has her in the picture sleuthing him down.” (Christie, *Fate* 76) と言われているように、タペンスは稀に見る勇敢な女性であり、彼女に狙われる人間こそ気の毒であるという、高い評価を受けている。2人は20代から70代を通して描

矣

かれ、タペンスは妻になり、母親や祖母になっても、冒険が大好きな探偵であり続け、夫のトミーは常にタペンスを補佐してきた。

クリスティーと同時期に活躍していたドロシー・L・セイヤーズは、ピーター・ウィムジイ卿のパートナーとして、ハリエット・ヴェインという推理小説家を登場させた。『毒を食らわば』(*Strong Poison*, 1930)で、恋人を殺したとして法廷の被告席に立っていたハリエットは、ウィムジイに無実を証明され、自由の身になった。

『死体をどうぞ』(*Have His Carcase*, 1932)で、1人で気ままな徒歩旅行に出かけたハリエットは、潮の引いた浜辺で昼食をとると、暖かい日差しのために、眠り込んでしまった。突然、ハリエットは叫び声のような音で目を覚まし、波打ち際に聳える岩の上で、喉を切られた若い男の死体を発見した。ハリエットは、死体が満潮に乗って海に消えてしまう前に、死体の写真を撮った。ハリエットが警察を連れて現場に戻って来た時には、死体は消えていたが、ハリエットが撮った写真により、死体の身元は、ホテル専属のダンサー、ポール・アレクシス (Paul Alexis) だということが判明した。ハリエットは、ロンドンから急行してきたウィムジイと共に、殺人事件の調査を開始する。

タペンスとトミーとは異なり、ハリエットとウィムジイの関係は、なかなか進展しない。初めて会って以来、ウィムジイは幾度もハリエットに求婚するのだが、ハリエットは “The best remedy for a bruised heart is not, as so many people seem to think, repose upon a manly bosom. Much more efficacious are honest work, physical activity, and the sudden acquisition of wealth.” (Sayers, *Have His Carcase* 1) (以下 *Carcase* と略す) と記述されているように、ウィムジイを受け入れるよりも、仕事をして、体を動かし、富を得る事を選んだ。殺人事件の被告人として法廷に立った事が、推理小説家としての良い宣伝になったのである。

また、ハリエットはウィムジイに絞首刑になるところを救われたため、

ウィムジイに感謝はしているが、それを負い目に感じてしまい、素直になれないでいた。それが、求婚を断ってしまう理由だった。『学寮祭の夜』(*Gaudy Night*, 1935) でハリエットは、遠ざけてきた母校のオックスフォード大学の学寮祭に出席した。旧友や教官たちからウィムジイについて聞かれたハリエットは、次のような気持ちになった。

Harriet, meanwhile, sat miserably wondering what devil possessed her to display every disagreeable trait in her character at the mere mention of Wimsey's name. He had done her no harm; he had only saved her from a shameful death and offered her an unswerving personal devotion; and for neither benefit had he ever claimed or expected her gratitude. It was not pretty that her only return should be a snarl of resentment. The fact is, thought Harriet, I have got a bad inferiority complex; unfortunately, the fact that I know it doesn't help me to get rid of it. I could have liked him so much if I could have met him on an equal footing...

(Sayers, *Gaudy Night* 32)

ハリエットは、ウィムジイについて色々と聞かれたため、感じの悪い態度を旧友に取ってしまった。ウィムジイは自分を屈辱的な死から救い、個人的に揺るぎなく尽くしてくれた。その一方、ハリエットに対しては、感謝の念一つ、要求も期待も何一つしていない。『死体をどうぞ』でハリエットはウィムジイに向かい “But do you think it makes matters any more agreeable to know that it is only the patronage of Lord Peter Wimsey that prevent men like Umpelty from being openly hostile?” (Sayers, *Carcase* 165-166) と言った。ハリエットは、事件
捜査を担当しているアンブルティ警部 (Inspector Umpelty) に疑われ

歯

たが、ハリエットがウィムジイの庇護下にあるおかげで、アンブルティ警部がハリエットに反感を持たないのだと思い知らされたため、ウィムジイに毒突いてしまった。ウィムジイにこのような態度を取ってしまうハリエットは、自分に劣等感があり過ぎるのだと思った。対等の立場で出会う事が出来ていれば、ウィムジイに好感を持たなくてはとハリエットは考えたのである。

『学寮祭の夜』でのハリエットは、匿名の手紙と不快な悪戯が学内を震撼させているため、調査をして欲しいという依頼を受けた。ハリエットはウィムジイにはこの事を秘密にしていたのだが、偶然知り合ったウィムジイの甥を介して、ウィムジイの知るところとなった。ウィムジイはハリエットに当てた手紙に “But I know that, if you have put anything in hand, disagreeableness and danger will not turn you back, and God forbid they should. Whatever it is, you have my best wishes for it.” (Sayers, *Gaudy Night* 261) と記した。このようにウィムジイは、一度取り組んだ以上は、その問題が危険であろうが不快であろうが引き返さないのがあなただと、ハリエットを激励している。ウィムジイは、ハリエットに自ら危険を冒す権利があることを認め、ハリエットも、ウィムジイから対等であることを認められたと悟ったのだった。

『学寮祭の夜』のラストで婚約し、『忙しい蜜月旅行』(*Busman's Honeymoon*, 1937) で結婚式を挙げた2人はハリエットの故郷へ新婚旅行に出掛けたが、滞在先の邸宅に着いた途端に、行方不明だった邸の元所有者の死体が発見され、2人は事件に巻き込まれた。1938年に発表された短編「幽霊に憑かれた巡査」(“The Haunted Policeman”)では第1子が誕生、1942年の「桃泥棒」(“Tolboys”)では息子が3人になっている。³⁾ 1936年までセイヤーズが執筆して未完のままだった作品を、ジル・ペイトン・ウォルシュ (Jill Paton Walsh, 1937~) が完成させた『座天使、主天使』(*Thrones, Dominations*, 1998) では2人の夫婦生活が描かれる。同じくウォルシュによって書かれた『死の推論』(A

Presumption of Death, 2002) は、1940年のイギリスの田舎の村が舞台になっている。ウィムジイは秘密の任務で外国に行っており、ハリエットは子供たちを連れて、ハリエットの故郷にあるトールボーイズ (Tolboys) という田舎屋敷に移り住んでいる。この村で殺人事件が起こり、ハリエットは地元警察に頼まれたため、嫌々ながら捜査を引き受けた。

名探偵の相棒と言え、シャーロック・ホームズにはワトスン医師 (Dr Watson), エルキュール・ポアロにはアーサー・ヘイスティングズ大尉 (Captain Arthur Hastings) がいたが、ワトスンもヘイスティングズも、探偵の優秀さを引き立てるための人物で、探偵と同等もしくはそれ以上の能力を持ってはいなかった。これに対して、タペンスとトミーは常に対等の立場で、互いの能力を発揮し合い、互いの欠点を補ってきた。一方、『死体をどうぞ』でのハリエットとウィムジイは、同等の捜査能力を見せるが、『学寮祭の夜』では、ハリエットに依頼された内容が自分だけでは手に負えず、ウィムジイの協力を求めずにはいられなかった。つまり、ここでのハリエットはワトスンの役割に徹している。『忙しい蜜月旅行』以来、ハリエットは積極的には事件捜査に関与せず、ウィムジイが捜査をしているのを見守っている。

このように、タイプは異なるが、タペンスとハリエットはどちらも、パートナーには欠かせない存在になっている。タペンスとトミー——主に好奇心旺盛な妻が事件に首を突っ込んで危険な目に遭い、それを夫と2人で力を合わせて解決していく——タイプは継承されていく。まず、アメリカの夫婦で推理小説を書いているフランシス・ロックリッジ (Frances Lockridge, 1890~1963) とリチャード・ロックリッジ (Richard Lockridge, 1898~1982) が創造したパメラ&ジェラルド・ノース (Pamela and Gerald North) 夫妻。次に、アメリカの推理小説家キャロリン・G・ハート (Carolyn Gimpel Hart, 1936~) のアニー・ローランス (Annie Laurance) とマックス・ダーリング (Max

Darling)。⁴⁾ 一方、ハリエットとウィムジイ — 夫が事件に巻き込まれる時には常にそばにいて、妻がその手助けをする — タイプは、イギリスのパトリシア・モイーズ (Patricia Moyes, 1923~2000) のヘンリ・ティベット警部 (Inspector Henry Tibbet) と、その妻エミー (Emmy) が継承した。

結

以上、4人の女性推理小説家たちの作品で活躍する女性探偵たちを、タイプ別に考察してきた。いずれも、男性に負けず劣らず、もしくは男性以上の行動力や推理力を持った人物ばかりである。また、グリーンのアメリア・バターワースとクリスティーのミス・マープル以外は、プロの私立探偵と本業の傍らに探偵活動をしているという違いはあるものの、仕事を持つ自立した女性である。特にグリーンของヴァイオレット・ストレンジは、それまでは男性の探偵が主役だった主な推理小説の中で、主人公になった初の若くて独立した女性探偵と言える。

現代では、アメリカの女性作家ジョン・ヘス (Joan Hess, 1949~) のアーリー・ハンクス (Arly Hanks) という警察署長やパトリシア・コーンウェル (Patricia Cornwell, 1956~) が創造した検死官ケイ・スカーベッタ (Dr. Kay Scarpetta)、イギリスのリザ・コディ (Liza Cody, 1944~) のアンナ・リー (Anna Lee) という調査員など、男性が従事していた職場に進出したプロの女性が増えた。

一方、アマチュア探偵も多様化している。例えば、キャロリン・G・ハートのアニー・ローランス・ダーリングはミステリ専門書店のオーナー、同じくハートが創造した年配女性のヘンリー・O (Henrie' O) は、元記者で引退後は推理小説家をしている。アメリカのキャロリン・キーン (Carolyn Keene)⁵⁾ はナンシー・ドルー (Nancy Drew) という少女探偵を、イギリス人作家スーザン・ムーディ (Susan Moody, 1940~)

は、ペニー・ワナワケ (Penny Wanawake) という黒人の素人探偵を登場させた。その他にも、あらゆる職業を持つ傍らに探偵として活躍する女性たちがいる。⁶⁾ このように、推理小説の中で、女性探偵は重要な存在になっているのである。この流れを築いたのが、A・K・グリーン、アガサ・クリスティー、ドロシー・L・セイヤーズ、P・D・ジェイムズの4人であると言える。

[注]

- 1) セイヤーズ自身は、キャサリン・アレグザンドラ・クリンプスン (Katheine Alexandra Climpson) という独身の中年婦人を創造した。クリンプスンは、表向きはタイピスト紹介所だが、実際は、変わった調査を扱うことを仕事とする女性ばかりの事務所に勤めており、この事務所は、ピーター・ウィムジイが陰で資金を出している。クリンプスンは、『不自然な死』 (*Unnatural Death*, 1927), 『毒を食らわば』などで、ウィムジイの捜査を手伝う。
- 2) ≪イエーガー≫ (JAEGER) は、1884年に創立された、イギリスのファッション・ブランド。主に、衣服やバッグなどを手掛けている。
- 3) 『死の推論』で、ハリエットとウィムジイの子供は2人のみであるため、「桃泥棒」の時代設定は『死の推論』より後であると考えられる。
- 4) 第1作目の『デス・オン・ダイヤモンド』 (*Death on Demand*, 1987) で恋人同士だったアニーとマックスは、第4作目の『ハネムーン殺人』 (*Honeymoon with Murder*, 1989) で夫婦になった。
- 5) キャロリン・キーンとは、アメリカ人作家エドワード・ストラッテメイヤー (Edward Stratemeyer, 1862~1930) が、ナンシー・ドルーを主人公にした小説、『古時計の秘密』 (*The Secret of the Old Clock*, 1930) を発表するために用意された筆名である。ストラッ

テメイヤーの死後、娘のハリエット・S・アダムズ (Harriet Stratemeyer Adams, 1892~1982) やアメリカの児童文学者ミルドレッド・A・ワート・ベンソン (Mildred A Wart Benson, 1896~2002) らによって、ナンシー・ドルー・シリーズは引き継がれた。

- 6) いずれもアメリカ人作家である、バーバラ・ダマート (Barbara D' Amato, 1938~) はキャット・マーサラ (Cat Marsala) というリポーター、ナンシー・ピカード (Nancy Pickard, 1945) はジュニー・ケイン (Jenny Cain) という市民財団の所長、エリザベス・ピーターズ (Elizabeth Peters, 1927) はアメリカ・ピーボディ (Amelia Peabody) という考古学者、アマンダ・クロス (Amanda Cross, 1926~2003) はケイト・ファンスラー (Kate Fansler) という大学教授を探偵役にした。

[Works Cited and Consulted]

Bunson, Matthew. *The Complete Christie: An Agatha Christie Encyclopedia*. (笹田裕子・Roger Prior 共訳『アガサ・クリスティー大事典』柊風舎, 2010年。)

Christie, Agatha. *The Body in the Library*. London: Harper Collins, 2002. (山本やよい訳『書斎の死体』早川書房, 2004年。)

———. *By the Pricking of My Thumbs*. London: Harper Collins, 2001. (深町眞理子訳『親指のうずき』早川書房, 2006年。)

———. *Cards on the Table*. London: Harper Collins, 2001. 加島祥造訳『ひらいたトランプ』早川書房, 2003年。)

———. *4:50 from Paddington*. London: Pan Books, 1976. (松下祥子訳『パディントン発4時50分』早川書房, 2004年。)

兎 ———. *Mrs. McGinty's Dead*. London: Fontana Collins, 1976. (田村隆一訳『マギンティ夫人は死んだ』早川書房, 2003年。)

- . *The Murder at the Vicarage*. London: Harper Collins, 2002.
 (田村隆一訳『牧師館の殺人』早川書房, 2008年。)
- . *N or M?* New York: Penguin Books, 2000. (深町眞理子訳
 『NかMか』早川書房, 2004年。)
- . *Postern of Fate*. New York: Penguin Books, 2000. (中村能
 三訳『運命の裏木戸』早川書房, 2004年。)
- . *The Secret Adversary*. New York: Penguin Books,
 2001. (田村隆一訳『秘密機関』早川書房, 2003年。)
- . *Third Girl*. London: Harper Collins, 2002. (小尾芙佐訳『第
 三の女』早川書房, 2004年。)
- . *The Thirteen Problems*. London: Harper Collins, 2002. (中
 村妙子訳『火曜クラブ』早川書房, 2003年。)
- Green, Anna Katharine. *The Circular Study*. (平林初之輔訳『七つ
 の燈』新青年昭和4年第10巻収録)
- . *The Golden Slipper and Other Problems for Violet Strange*.
 New York: General Books, 2009. (秋津知子訳「第二の銃弾」『シャー
 ロック・ホームズのライヴァルたち』収録, 早川書房, 1984年。)
- James, P.D. *An Unsuitable Job for a Woman*. London: Faber and
 Faber, 2005. (小泉喜美子訳『女には向かない職業』早川書房,
 1991年。)
- . *The Skull Beneath the Skin*. London: Faber and Faber,
 2005. (小泉喜美子訳『皮膚の下の頭蓋骨』早川書房, 1995年。)
- Klein Kathleen Gregory. *The Woman Detective- Gender & Genre*.
 University of Illinois Press, 1988. (青木由紀子訳『女探偵大研究』
 晶文社, 1994年。)
- Maida, Patricia D. *Mother of Detective Fiction: The Life and Works
 of Anna Katharine Green*. Ohio: Bowling Green, 1989.
- Sayers, L. Dorothy. *Gaudy Night*. London: Hodder & Stoughton,

2003. (浅羽英子訳『学寮祭の夜』東京創元社, 2001年。)
- . *Have His Carcase*. New York: Harper Collins, 2006. (浅羽英子訳『死体をどうぞ』東京創元社, 2007年。)
- . “The Omnibus of Crime”. *The Art of the Mystery Story; A Collection of Critical Assays*. Ed Howard Haycraft. New York: Grosset & Dunlap, 1947:71-109. (宮脇孝雄訳「探偵小説論」『ピーター卿の事件簿Ⅱ顔のない男』収録, 東京創元社, 2008年。)
- Symons, Julian. *Bloody Murder*. New York: A Time Warner Company, 1992. (宇野利泰『ブラッディ・マードー』新潮社, 2003年。)
- Van Dine, S. S. “Twenty Rules for Writing Detective Stories”. *The Art of the Mystery Story; A Collection Critical Assays*. Ed Howard Haycraft. New York: Grosset & Dunlap. 1947:189-193. (仁賀克雄 編・訳『ミステリの美学』成甲書房, 2003年。)
- 小鷹信光『パパイラスの船』早川書房, 1975年。